

当代外语
研究论丛
FOREIGN
LANGUAGES
STUDIES
语言学研究系列

日语复合动词的 多义研究

(日文版)

日本語の複合動詞の多義性に関する研究

杨晓敏◎著



语
言
学
研
究
系
列



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

日语复合动词的 多义研究

(日文版)

日本語の複合動詞の多義性に関する研究

本书是2016年国家社会科学基金后期资助项目「认知语义学视角下的日语复合动词研究」
(项目批准号: 16FYY020) 的阶段性研究成果

杨晓敏◎著



内容提要

本书为“当代外语研究论丛”系列之一,全书主要从句法、语义和语用的角度明确了复合动词前后项构成要素的基本特征,并运用认知语言学的意象图式理论和隐喻理论讨论了复合动词多义性的实现及其认知机制,分析了其语义扩展的规律。本书的读者对象主要为日语专业的高校教师、考研人员、研究生等。

图书在版编目(CIP)数据

日语复合动词的多义研究:日文版 / 杨晓敏著.

—上海:上海交通大学出版社,2018

ISBN 978-7-313-19928-7

I. ①日… II. ①杨… III. ①日语-动词-研究

IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 183606 号

日语复合动词的多义研究(日文版)

著 者:杨晓敏

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

出版人:谈毅

印刷:当纳利(上海)信息技术有限公司

开 本:710mm×1000mm 1/16

字 数:324 千字

版 次:2018 年 10 月第 1 版

书 号:ISBN 978-7-313-19928-7/H

定 价:88.00 元

地 址:上海市番禺路 951 号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:17.25

印 次:2018 年 10 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:021-31011198

序



日语复合动词是日语动词研究的重要课题之一,长期以来国内外学者对此进行了深入探讨,取得了不少研究成果,然而尚留有诸多课题。

杨晓敏博士的《日语复合动词的多义研究》一书,采用了现代词汇语义分析方法,并运用了认知语言学作为指导理论,对日语复合动词前后项要素的复杂语义关系、语义扩展路径等作了深入的剖析,着重探讨了作为复合动词的构成要素「自立語 V」和「付属語 v」是否连续的问题,以及自「自立語 V」向「付属語 v」转变时,句法、语义及语用上呈现的特点,进而论述了「自立語 V」向「付属語 v」转变是基于什么样的认知机制得以实现,并通过个例的具体分析验证了这一语义转变的过程。

据了解,在 2009 年张威教授曾获得关于复合动词研究的国家社科基金的立项,接着在 2010 年后《日语学习与研究》等相关刊物陆续刊登了多篇有关复合动词的论文。可见,作者于 2006 年的这一博士论文选题在当时国内的日语学界是颇为新颖、具有开拓性的。

多年来作者始终保持着对复合动词的浓厚兴趣,并将研究视野由本体研究扩大到日语教学、汉日对比,其另一部汉语书稿



《认知语义学视角下的日语复合动词研究》得到了2016年国家社科基金的后期资助。对于潜心学术的青年教师来说,这一资助无疑对其研究工作起到了很大的促进作用,也是对她科研能力的认可。

本书是在其博士论文的基础上,汲取现代语言学新的理论和观点,进行修正、补充而形成的,不断的修改使得论文质量得到了进一步提升,也使本书成为具有很强实用性和科学性的学术专著。本书的出版有助于日语学习者对日语复合动词的理解和掌握,同时对复合动词研究的深入开展必将起到积极的推动作用。

期待本书早日问世。

上海外国语大学教授、博士生导师

沈宇澄

目次



- 第 1 章 序章 1
 - 1.1 本書の目的、意義と方法 3
 - 1.2 日本語の複合動詞に関する従来の研究 8
 - 1.3 本書の立場 12
 - 1.4 本書の構成 16
- 第 2 章 複合動詞の範疇 19
 - 2.1 複合動詞の定義について 21
 - 2.2 複合と派生 22
 - 2.3 「V₁ + V₂」に見られる語基性と接辞性との連続 24
 - 2.4 本書で扱う複合動詞の範疇 26
- 第 3 章 構成要素に見られる複合動詞の全体像 29
 - 3.1 前項、後項要素の基本的な特徴 31
 - 3.2 統語論の視点から見る複合動詞の構成要素の
多義性 41
 - 3.3 意味論の視点から見る複合動詞の構成要素の
多義性 64
 - 3.4 語用論の視点から見る複合動詞の構成要素の
多義性 82
 - 3.5 むすびに 96
- 第 4 章 複合動詞の構成要素の意味拡張の実現
——認知言語学的アプローチ—— 99
 - 4.1 はじめに 101

4.2	複合動詞の構成要素の意味拡張に見られるイメージ・スキーマの働き	103
4.3	複合動詞の構成要素の意味拡張に見られる概念メタファーの働き	122
4.4	むすびに	143
第5章	複合動詞の構成要素の多義性に関する個別研究 ——「ー出す」と「ー上げる」を例に——	145
5.1	後項要素「ー出す」の多義性をめぐって	147
5.2	後項要素「ー上げる」の多義性をめぐって	178
第6章	終章	209
6.1	本書の成果	211
6.2	今後の研究課題	217
付録1	用例出典	221
付録2	第3章の調査対象に当たる2523語の複合動詞例	227
参考文献		256
索引		265
後記		267



序章

第1章

1.1 本書の目的、意義と方法

日本語に複合動詞が数多く存在する。森田(1978)によると、『例解国語辞典』に収録されている複合動詞は1817語であり、日ごろ使用している動詞の四割ぐらい占め、更に「ーすぎる」のようなどんな動詞にも付きやすい語を加えると、複合動詞は無数に増えていくはずだということである^①。複合動詞が大量に存在する一方、使い方も単純動詞より複雑であるため、日本語学習者にとって、その習得が容易ではないことがよく指摘される。たとえば、森田(1978)は、

外国人が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない。したがって、複合動詞に関する日本語力が不十分なまま上級段階に進んでしまい、圧倒的に多い複合動詞の波にぶつかって苦しまねばならぬ。複合動詞を形づくるそれぞれの部分、すなわち個々の単純動詞が既習語であっても、それらが合成する意味が理解できるとは限らない。

森田(1978: 73)

と述べ、複合動詞の習得の難しさを指摘している。

ところで、複合動詞のどのような所が難しいのかというと、

① 森田(1978)「日本語の複合動詞について」p.71-72を参照する。

松田(2004)は以下のように指摘している。

(1)「結合条件」に関するもの：

①どんな動詞と結びつくのか分からない。そのため勝手に単語を作り出す危険性がある。

(2)「単純動詞」と「複合動詞」の使い分けに関するもの：

②「書きこむ」という言葉を知っていても「書く」と「書き込む」をどう使い分けてよいかわからない。そのため「書きこむ」の方が適切な場合であっても「書く」で間に合わせてしまう。

③「-こむ」の意味は「飛びこむ」のような事例から「中に入る」ことだと思っている。しかし「入りこむ」や「埋めこむ」は「入る」や「埋める」自体がすでに「中に入る」ことなのに、なぜ「-こむ」をつけるのか分からない。

(3)「習得の方法」に関するもの：

④「-きる」や「-こむ」などと結合する複合動詞の数は非常に多く、その意味は単に「V1の意味+V2の意味」だけでは理解することが出来ない。

⑤「座る」(単純動詞)と「座りこむ」(複合動詞)の意味の違いを知りたい時辞典を引くが、説明が十分ではない。

⑥V1の意味とV2の意味を足してもその意味が分からない時、それぞれを母語に対訳して理解しようとするが、あまり効果がない。

松田(2004: 2)

確かに松田(2004)の指摘した通りである。「読み始める・読み終わる」のように、動詞1と動詞2の意味を足せば分かる複合動詞はまだ良いが、動詞1と動詞2だけではどうも理解できない複合動詞も数多く存在する。それが学習者を最も悩ませる所と言えよう。例えば、

(1-1) 暴風により掲示板が吹き飛ばされたり、住民がけがをしたりするのを防ぐのが目的。
(asahi20050906^①)

(1-2) 安倍晋三首相が17日の参院本会議で行った所信表明演説で、「高等教育の無償化」に関するくだりを読み飛ばす一幕があった。
(asahi20171117)

(1-3) そしてその間は断じて遊び半分の気分を許さず、びしびし叱り飛ば

① 本書の例文は主として、北京日本学研究中心(2003)が制作した『中日対訳コーパス』(第一版)、『少納言 KOTONOHA』現代日本語書き言葉均衡コーパス』、辞書と参考文献から引用したものと、検索エンジン www.asahi.com を通じてネットコーパスから引用したものがある。『中日対訳コーパス』と『少納言 KOTONOHA』現代日本語書き言葉均衡コーパス』から引用したものは(『作品名』)と示し、朝日新聞 www.asahi.com のサイト内検索で入手した例文は(asahi 日付)と示す。詳細は『付録1・用例出典』で表示する。

しました。

(『痴人の愛』)

- (1-4) 百姓がその残酷な血税を払わなければならない為に如何に惨めな生活をしているか、娘を売り飛ばし、子供を工場へやり、自分の作った米も食えず、芋と南瓜ばかりを食っている。(『近代作家入門』)

「吹き飛ばす」は「風が強くてものを飛ばす」という意味であり、動詞「吹く」と「飛ばす」の意味を足せば大体分かるが、「読み飛ばす」は「途中を抜かして読む」という意味を表し、「叱り飛ばす」は「厳しく叱る」という意味を表し、「売り飛ばす」は「ためらいなく売り渡す」という意味であり、いずれの「-飛ばす」も「空中を飛ぶようにする」という意味と直接関わっておらず、日本語の学習者にとっては極めて難解なものである。また、

- (1-5) 彼だけが上着を脱いで、ワイシャツの腕をまくり上げている。

(『あした来る人』)

- (1-6) 「クライアント」がどうのこうの、「ワールドワイドに」どうしたこうした、「リストラ」がなんたらかんたら……みごとにお仕事用語を使いこなして、「立て板に水」のいきおいでしゃべりまくっている。

(『犬がころんだ』)

- (1-7) 世界には嵐が吹きまくっている。思想の嵐が。(『友情』)

「捲り上げる」は「ワイシャツの腕を捲って上げる」ということであり、「捲る」も「上げる」も本動詞の意味のままで用いられているが、「しゃべりまくる・吹きまくる」の「-まくる」は前項「しゃべる・吹く」が勢いよくずっと続くという様子を示し、本動詞「捲る」との間にずれが見られる。このように、複合動詞の難点の一つとして、「-飛ばす」、「-まくる」のような複合動詞の構成要素の多義性が挙げられよう。実際、複合動詞の構成要素、特に後項要素が二つか、二つ以上の意味用法を持つという現象がよく見られる。

a. 真っ先に駆けつける

b. 行きつけている店

aの「-つける」は強い勢いで到達するという意味であるが、bの「-つける」は前項が表す動作が習慣になっていることを示す。

a. 草を押し切る

b. 澄み切った秋空

aの「-切る」は切断するという意味であるが、bの「-切る」はすっかりその状態になっているという意味を表す。

- { a. 槍で天井を突きぬく
- { b. 最後まで走りぬく
- { c. 借金の困りぬく

aの「ーぬく」は穴をえぐって通り抜けるようにするという意味であるが、bの「ーぬく」は「最後まで」という意味を示し、cの「ーぬく」は「すっかり……する」の意を表す。

- { a. 土砂をポンプで吸い上げる
- { b. 小説を書き上げる
- { c. 私の見たすべてを申し上げる

aの「ー上げる」は対象を下から上へ移すという意味であるが、bの「ー上げる」は前項要素の完成を表し、cの「ー上げる」は謙譲を表す。

- { a. 辛さを忍び耐える
- { b. こそ泥が窓から忍び込む

aの「忍びー」は我慢するという意味を表すが、bの「忍びー」は「人に気づかれないようにそっと……する」という意味を示す。

このように、日本語の複合動詞に見られる多義性の例を挙げればきりが無い。複合動詞の構成要素(前項と後項)の多くが多様な意味用法を持ち、それに複合動詞における意味用法が本動詞とずれがあり、本動詞の意味からは直接推し量ることができないということが複合動詞の難点だと言えよう。一つの構成要素に見られる各意味用法がどう産まれたのか、複合動詞の構成要素の意味変化において、どのようなルールが見られるのかということが解明できれば、複合動詞の習得には大いに役立つと考えられる。本書はそれを主要な課題とする。

複合動詞の構成要素の多義性を考察する際に、まず、一つの多義語に「基本的な意味」(または「典型的な意味」、または認知言語学で言う「プロトタイプ^①的な意味」と「周辺的な意味」があるということを確認しておきたい。上述した「ー上げる」を例に見よう。

- 土砂をポンプで吸い上げる^②
- 土砂をポンプで上げる
- 土砂をポンプで下から上へ吸い上げる

① 河上(1996) p.32の論述を参照する:「プロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体をいう。プロトタイプはカテゴリーを考える場合にまず念頭に置かれる、いわばそのカテゴリーの代表的な成員であり、そのカテゴリーを踏まえての思考では、特に修正を必要とするような状況が出てこない限り、プロトタイプの成員のことを想定して進められるのが普通である。」

② 「○」印は適格な表現を、「×」印は不適格な表現を、「？」印はやや曖昧な表現を指す。

- 小説を書き上げる
- × 小説を上げる
- × 小説を下から上へ書き上げる
- 私の見たすべてを申し上げる
- × 私の見たすべてを上げる
- × 私の見たすべてを下から上へ申し上げる

「対象を下から上へ移す」という意味で用いられる「－上げる」は単独でも名詞「土砂」を支配することができ、方向を表す「下から上へ」というフレーズと共起できるが、完成や謙譲を表す「－上げる」は単独で名詞を支配することが出来ず、方向を表す表現と共起しにくい。つまり、「対象を下から上へ移す」という意味を表す「－上げる」は基本的に本動詞「上げる」の意味を保っているのに対し、完成や謙譲を表す「－上げる」はなんらかの変化や拡張によって産まれた用法と考えられよう。したがって、「対象を下から上へ移す」という意味が後項「－上げる」の基本的な意味であり、完成や謙譲を表す意味は「－上げる」の周辺的な意味となる。

次に、レイコフ(1987)が「多様な意義が互いに認知的動機づけられた関係を持つ」と主張したように、一つの多義語に見られる各意味用法はそれぞれ独立したものではないということを確認しておきたい。再び「－上げる」を例に見ると、「－上げる」に見られる各意味用法が互いに係わりなく存在しているわけではなく、なんらかの関係で互いにつながっている。しかし、「対象を上へ移す」や「完成」や「謙譲」などの意味用法がどのようにつながっているのか、「上へ移す」という基本的な意味がどうやって他の意味用法に拡張されているのか、その拡張がいつ頃に実現されるのかそれとも次第に実現されるのか、もし次第に実現されるとすれば、どのような段階が見られるのか、またそのような拡張が実現される原因は何なのかなどに関しては、今までの研究では答えが見つからないようである。

したがって、本書は統語、意味と機能の面から複合動詞の特徴を明らかにした上、複合動詞の構成要素に見られる多義性を分析し、意味の変化や拡張において、どのようなルールが働いているのかを探りたい。具体的に言うと、複合動詞の構成要素に見られる多様な意味用法が互いにどう関わっているのか、基本的な意味からどのように他の意味に変わっていくのか、その意味変化にはどのようなパターンがあるのか、またその意味変化がどうやって実現されるのかなどについて考察し、統語論、意味論、語用論、認知意味論などの角度から複合動詞の多義性の実現パターンとプロセスを究明したいと考える。

1.2 日本語の複合動詞に関する従来の研究

日本語の複合動詞に関する研究は盛んに行われてきた。ここで、複合動詞の種類や結合条件に関する体系的研究と複合動詞の前項と後項の意味関係や構成要素の意味用法に関する意味論的研究について紹介したい。

1.2.1 種類や結合条件に関する体系的研究

複合動詞の種類や結合条件に関する研究には、寺村(1969・1982)、長嶋(1976・1997)、山本(1984)、石井(1983・1984・1988・1992)、影山(1993)、由本(1996)、松本(1998)等が挙げられる。

寺村(1969・1982)は前項、後項の意味が保持されているかどうかを根拠に、複合動詞を四種類に分類している。

1. 自立語 V + 自立語 V (例: 呼び入れる、握りつぶす)、各部分が自立語の意味を保持し、二つの動作が連結して表現する
2. 自立語 V + 付属語 v (例: 降り始める、呼びかける)、後項が自立語の意味を喪失し、後項が前項のあり方を限定する
3. 付属語 v + 自立語 V (例: 差し出す、振り向く)、前項が接頭語化し、前項が後項にニュアンスを付加する
4. 付属語 v + 付属語 v (例: 切り上げる、取り持つ)、各部分が自立語の意味を喪失し、一語として不可分離となる

寺村(1969・1982)の研究は後の研究者に大きな示唆を与えるものであるが、自立語と付属語との境界線に関しては言及しておらず、その要素が自立語か、それとも付属語かを判断することが難しい。むしろ、最初から付属語であるものが存在せず、付属語はみな自立語から発展してきたものであり、そのため、場合によって自立語か付属語かと言い切れないことがあろう。そこで、自立語 V から付属語 v に至るまで、その変化がどうやって実現されるのが本書の関心を持つ所である。

一方、長嶋(1976)は動詞が名詞を支配するか否かを根拠に、複合動詞を二類型に分類している。

類型Ⅰ: $v_1 + V_2$ (修飾要素 + 被修飾要素)

例: 木を切り倒す = 木を切る・木を倒す

類型Ⅱ: $V_1 + v_2$ (被修飾要素 + 修飾要素)

例: 犬が子供に噛み付く = ×犬が子供につく

分類の基準点は明示されているが、複合動詞のすべてが包括されていると

は言えない。たとえば、「泣き叫ぶ・待ち望む・落ち込む」などは類型Ⅰにも類型Ⅱにも入らないであろう。

ところで、山本(1984)がより客観的な「格」に目を向け、前項動詞と後項動詞の格支配を基準に複合動詞を以下の4類型に分類している。

類型Ⅰ：前項と後項のいずれもが複合動詞文中の名詞に対する格支配関係を有する(例：投げ捨てる・光り輝く・降り積もる・踏み荒らす)

類型Ⅱ：前項のみ複合動詞文中の名詞に対する格支配関係を有する(例：見上げる・沸き立つ・降り出す・食べ過ぎる)

類型Ⅲ：後項のみ複合動詞文中の名詞に対する格支配関係を有する(例：打ち破る・取り澄ます・振り仰ぐ・差し挟む)

類型Ⅳ：前項と後項のいずれもが複合動詞文中の名詞に対する格支配関係を有しない(例：繰り返す・打ち解ける・取り締まる・引き立つ)

山本(1984)の研究は統語的な観点から分類したものであり、一つの客観的基準が示されたが、この分類法に当てはまらない例も見られる。たとえば、「虫が穴から這い出す」における「這い出す」はむしろ「虫が這う」の<が>格と、<対象を場所から出す>の<から>格との和と解釈でき、類型Ⅰから類型Ⅳのどれにも入りきれないようである。

以上のような記述的な研究がなされた一方、石井(1983・1984・1988・1992)は、構成要素となる動詞の「他動性・自動性」「意志性」「アスペクト」などといったカテゴリー的な意味を手がかりに、語構造の角度から複合動詞の構成を明らかにしようとし、「実現—結果」が複合動詞の最も基本的なパターンだと指摘している。

更に、影山(1993)は「語形成」という観点から複合動詞を扱い、複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に分類し、「統語的複合動詞」として次の27語を挙げた。

始動　　：－かける・－だす・－始める

継続　　：－まくる・－続ける

完了　　：－終える・－終る・－尽くす・－きる・－通す・－抜く

未遂　　：－そこなう・－損じる・－そびれる・－かねる・－遅れる・－忘れる・－残す・－誤る・－あぐねる

過剰行為：－過ぎる

再試行　：－直す

習慣　　：－つける・－慣れる・－飽きる

相互行為：－合う

可能　　：－得る



一方、「語彙的複合動詞」に関して、影山(1993)は動作の主語を「外項」、目的語を「内項」と呼び、まず日本語の動詞を他動詞、非能格動詞と非対格動詞の3種類に大別した。

- ①他動詞の項構造: $x < y >$ 例: 割る・読む
- ②非能格自動詞: $x < \quad >$ 例: 走る・歩く
- ③非対格自動詞: $\quad < y >$ 例: 割れる・折れる

そして、影山(1993)は、「語彙的複合動詞」の組み合わせには基本的に外項の有無、つまり外項を取る動詞どうか、外項を取らない動詞どうしによって作られる、すなわち「他動性の調和の原則」を主張している。

しかし、「他動性の調和の原則」を逸脱する例が多数見られ、由本(1996)と松本(1998)は「他動性の調和の原則」のかわりに「主語一致の原則」を提案している。

1.2.2 意味関係や意味用法に関する意味論的研究

複合動詞の前項後項の意味関係に関する研究に、森田(1978)、由本(1996)、松本(1998)などが挙げられる。

森田(1978)は意味の度合いから複合動詞に次のような幾つかの段階が見られると指摘している。

- 第1段階 並列関係: 寄りすぎる・押し開ける・遊び暮らすなど
- 第2段階 主述・補足関係: 思い余る・見飽きる・読みふけるなど
- 第3段階 具体的意味から抽象的意味へ: 降り出す・書き上げるなど
- 第4段階 造語成分への移行: 考えあぐねる・言いそびれるなど
- 第5段階 実質的意味から形式的意味へ: 叱り飛ばす・かき曇るなど

森田(1978)の分類は複合動詞において前項・後項要素にどれほど動詞の意味が保持されているのかという点に関心を示したのに対し、由本(1996)、松本(1998)は前項と後項との意味関係に目を向けた。

由本(1996)は複合動詞の前後項の意味関係を以下の五つのパターンに分けている。

- ・並列関係(例: 泣き叫ぶ)
- ・付帯状況・様態(例: 待ち暮らす)
- ・手段(例: 笑い飛ばす)
- ・因果関係(例: 遊びくたびれる)
- ・補文関係(例: 読み始める)

その上にそれぞれのパターンに関して意味論的制約があると指摘した。一方、松本(1998)は語彙的複合動詞に注目し、次の六つの種類に分類して